# つなごう！

## 手を・音を・クラスを

# つなごう！手を・音を・クラスを

3年生は、仙宝祭で、合唱「手をつなごう」と、リコーダー演奏「ソラシドレメドレー」を発表する。
陽菜は、音楽の授業が大好き。音楽の先生からも、歌やリコーダーをよくほめられていた。
みんなが難しがっている「ソラシドレメドレー」も、すぐに吹けて、ちょっと得意な気持ちだった。
「これなら、本番もバッチリだね」
――そう思っていた。

一方、拓海はリコーダーが苦手だった。
「できなくても、音を鳴らさなければバレないし」
「休み時間は遊びたいし、わざわざ練習なんて……」
そんなふうに思っていて、やる気がなかなか出なかった。

陽菜は、そんな拓海のことに気づいていなかった。
同じ3年梅組なのに――。

教室では、合唱も演奏もバラバラ。全然できていない人もいる。
でも、誰も何も言わない。気にもしていなかった。
「自分がちゃんとできていれば、それでいい」
みんな、周りのことなんて、全然気にしていなかった。

先生が言った。
「全員で合唱・演奏をしよう。
苦手な人をサポートして、みんなで音をそろえよう！」
その日から、少しずつ3年梅組に変化が起こった。
「一緒に練習しようよ！」
だれかが声をかけると、教室のあちこちで男の子も女の子も一緒にリコーダーを吹きはじめる。

「ここは、親指をちょっとずらすと出やすいよ」
リコーダーが得意な子が、苦手な子にどんどん声をかけていく。
陽菜も、拓海に声をかけてみた。
「一緒にやってみよう」
陽菜の声を聞いた拓海は、遊びに行くのをやめて、練習を始めた。
そして二人は、何度も同じフレーズを繰り返した。

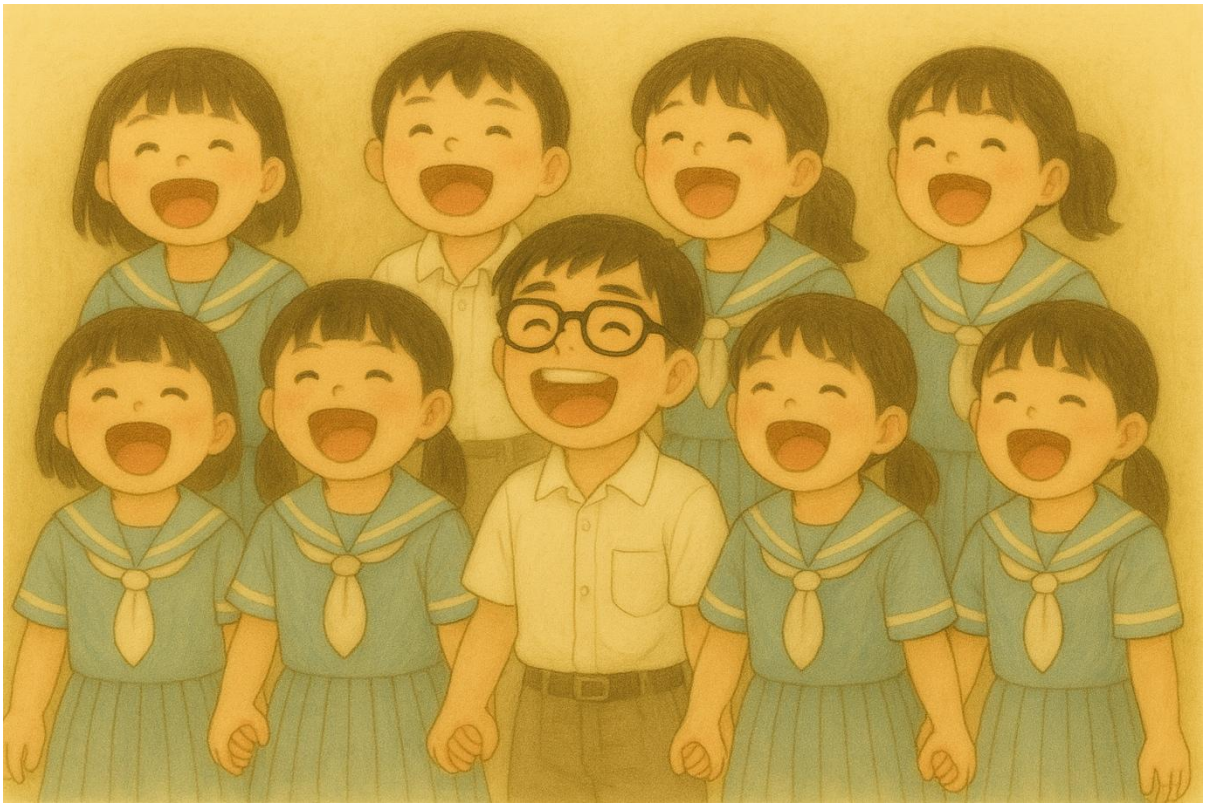
そんなある日の合唱練習。
先生に言われて、拓海が前に出て歌うことになった。
拓海は、とても楽しそうに、自然な笑顔で、元気に歌っていた。
その姿を見て、先生は言った。
「大きく口を開けて、すてきな笑顔で歌っていますよね！
みんなの顔はどうかな？」

そのあと、合唱練習の動画を見返す時間があった。
陽菜は、自分の顔を見てドキッとした。
（え……私、全然笑ってない）
隣の席の拓海と向かい合って歌ったときの笑顔を思い出した。
（歌は、私のほうが得意なはずなのに……）
その日から、陽菜は拓海をまねして、笑顔で歌うことを意識するようになった。
練習を重ね、合唱もリコーダーも、明らかに音がそろっていった。
そして、自分たちでも「よくなってきた！」という手ごたえをしっかり感じていた。
本番の日。
合唱「手をつなごう」では、陽菜も拓海も、笑顔で歌っていた。

「一人ひとりの音色があるから　認め合って重ねようハーモニー」

「ここの歌詞…3年梅組のことを歌っているみたい。」
陽菜は歌いながら、そう思った。
曲の最後は、みんなで「手」をつないで歌う。
「でも、つないだのは手だけではない気がする。」
拓海は歌いながら、そう思った。

そのあとのリコーダー演奏もカンペキだった。
「よろこびの歌」では、全員の音がぴたりと重なった。

手が・音が・クラスが
――つながった！

3年生の演奏が終わり、礼もバッチリそろった。
陽菜と拓海が同じタイミングで顔をあげる。
二人の頭の中では、「よろこびの歌」の音色が、キラキラと鳴り続けていた。